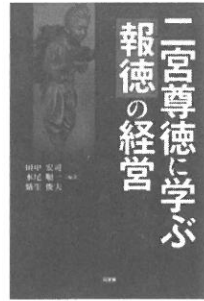




# 『二宮尊徳に学ぶ報徳の経営』

田中宏司 水尾順一 蟻生俊夫 編著  
同友館 1900円＋税



小学校のころ、校庭の片隅に二宮金次郎の像があった。薪を負って読書をするおなじみの姿である。毎日目にするとなかなか気づけなかったのだが、今にして思えば偉大さはわかる。

現在評者は尊徳が活動したエリアに近接したところに住んでいた事業所もある。常々思うのは、尊徳はいわゆる偉人というよりも、親しみある市井の思想家である。

大昔の篤農家との認識はもたれながらも、尊徳がすぐれたマネジメント思想家であったことはさほど知られていないかもしれない。

尊徳のワードの中には「至誠」「勤労」「分度」「推譲」など、現代社会でこそ復権に値する有効なコンセプトが多く見られる。

しかも、本書がみごとに展開しているのは、尊徳思想の継続性である。考えてみれば、江戸

時代に唱道された考え方が、現在にまでごく自然に引き継がれ、意識されている。しかも、きちんと機能している。驚くべきことである。少なくとも、他の農政家には見られないことかもしれない。

尊徳にあつては、経済と人生が分離していない。それは一つのものである。

ならば、尊徳の基本思想や行動を考えるに当たつても、経済と人生を分けて考えることに意味はないということであろう。本書は二部構成によるものだが、まずもつてその点に繊細な配慮が払われる。

ともに尊徳思想の普遍性に焦点が当てられ、たとえば、至誠

## 古くて新しい実践知の息吹

はコンプライアンスや顧客満足、勤労は従業員満足や危機管理、分度はコーポレート・ガバナンス、推譲は地域社会対応や社会貢献活動などといった具合である。私たちはつい欧文やカタカナで記される経営用語をありがたがるけれども、根本にながらる考えは日本にも古くからあつたのだと得心させられる。まさしく、尊徳の言動の中に普遍的経営コンセプトが具現していたのだ。

第二部はとてもカラフルで奥行きがある。どのようにして江戸時代から明治、大正、昭和、そして現代にいたるまで報徳思想が継承されてきたか、新鮮な実像がいきいきと展開される。

たとえば、渋沢栄一のような実業の巨人は言うに及ばず、真珠王の御木本幸吉、力織機の豊田佐吉、雪印のもとをつくった黒澤西蔵、松下幸之助、経済

リーダーだった土光敏夫にいたるそうそうたる経済人群像である。

いずれもが、現在にいたるも生きて継承されている。その点をきちんと意識すべきなのだと思う。

私たちはつい第二次大戦以前は、遠い外国のように、なじみのないものと感じてしまいがちである。昭和から明治にかけても想像力はなかなか及ばないし、江戸時代ともなれば、太陽系の果てを想像しろと言われるようなものだ。

けれども、歴史とは連続と継続していくものである。私たちの社会や生活の中に入りこんでいるものである。本書は二宮尊徳を素材に、私たちの生活に無意識に入つて機能している考え方の存在に気づかせてくれる。

もちろん外国の学者や実践家が提唱する理論も魅力的ではあるし、学ぶべきところも多いだろう。だが、まず足下にある知の遺産に目を向けることもとても大切なことのように思われる。

社会生態学研究者 森里陽一